

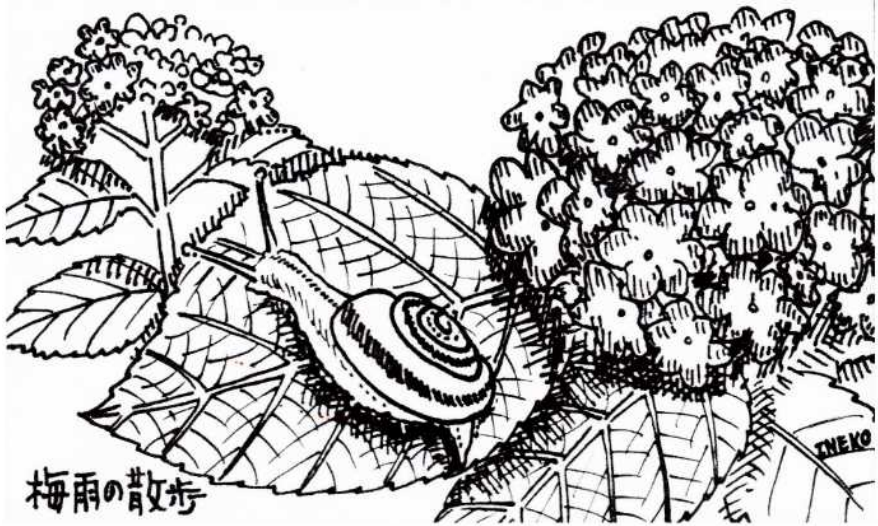
2005年 6月15日発行（隔月刊）



ろうか

2005年6月
第50号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇 田 川 幸 子



目 次

点字から識字までの距離(46) (知的障害の方への図書館サービス)	
墨字訳サービスと来館によるサービス (1) (山内 薫)	・・・ 1
酔夢亭読書日記 (10) (安田 章)	・・・・・・・ 4
愛知万博	
-視覚障害者にも楽しめる愛・地球博- (平瀬 徹)	・・・・・・・ 6
主要症状に対する理療施術 (5)	
～健康医学としてのあんま・マッサージ～ (小池上 惇)	・・・ 10
「うか」50号を迎えて (木下 和久)	・・・・・・・ 12
〈差別語・不快語〉考 (2) (岡田 健嗣)	・・・・・・・ 14
ご報告とご案内	・・・・・・・ 19
漢文のページ	・・・・・・・ 21

点字から識字までの距離 (46)

知的障害の方への図書館サービス (6)

墨字訳サービスと来館によるサービス (1)

山内 薫(墨田区立緑図書館)

ふれあいセンター福祉作業所で貸出をはじめた一九九八年から数年を経過するなかで、私たち図書館員と何人かの利用者とのコミュニケーションの関係も良好になり、図書館まで来てくださる方も出てきました。

本の貸し出しや会話の中で、利用者それぞれの好きな歌手や俳優なども分かってきましたので、例えばスピードの好きなTさんには、丁度そのころスピードを起用していたエプソンのプリンターのPRチラシを秋葉原の電気街に行ったついでに貰ってきて渡しました。またSさんが竹野内豊のファンであることも分かりましたので、廃棄する「a・r・a・r・a」や「M・E・N・S・N・O・O・N・N・O」などの雑誌に載っている竹野内豊の写真やいろいろなお店で見かけるポスターなどがあるとふれあいセンターを訪問する際に持っていました。

雑誌に載っている小さな写真などはブックカーという本の表紙に貼る透明のカバー・シートでコーティングした

りもしました。その後、Sさん自身がブックカーを貼ってほしいと自分で切り抜いた小さな写真を持って図書館までやって来るようになりました。図書館の事務室でいろいろな話をしたり料理や美容の本について相談を受けたりしていましたが、ある時、同僚が年賀状の代筆を依頼されました。

Sさんはお父さんと二人暮らしで、今までは結婚して別居しているお姉さんに頼んで手紙の代筆をしてもらっていたようですが、お姉さんに赤ちゃんが生まれて忙しくなったために頼めなくなり、手紙を図書館に持ってきたようです。年賀状は市販のスタンプが押してあるだけの二枚で、前年Sさんのところに来た年賀状を見ながら宛先と宛名を記入し、本文は口述筆記で書きました。

その後もお姉さんへの手紙や異動したふれあいセンターの職員への手紙等々様々な手紙の代筆を依頼されることになりました。また、ふれあいセンターをやめる人への色紙の代筆やお店などで注文するカードの作成など様々な代筆の依頼が寄せられるようになりました。

Sさんは軽い言語障害があるために慣れないと話していることが聞き取りにくく、また手が少し不自由であるために手紙の代筆や意思表示のためのカード作成を頼みに来るのでした。

今まで視覚障害の方の年賀状の宛名を代筆したり、申請書類を代筆したり、点字で書かれた手紙を便箋に手書きしたりするサービスを墨字訳サービスと呼んで実施してきました。

私が緑図書館に移ってきてからでも、九四年度一枚、九五年度五枚、九六年度一九枚、九七年度一枚、九八年度三四枚、九九年度三三枚、二〇〇〇年六五枚、〇一年一六枚、〇二年一六三枚、〇三年五六枚、〇四年五三枚と年々利用が増加しています。

特にSさんなどの知的障害の方の代筆をするようになった二〇〇〇年頃から枚数も増えていることがわかりました。また、こうしたサービス自体をご存知ない方も多く、一度利用すると図書館ではこんなこともやってくれるのかと度々利用していただけるようになるのです。

このサービスは以前にも述べましたように、『うか』第四六号)コミュニケーションや情報発信の障害を取り除いていくという図書館にとって根本的な命題だと考えています。もちろんすべてを図書館が引き受けるという訳



▲図書館の和室で手紙の

代筆をしているところ

ではありませんが、利用者が図書館を選択して要望を寄せてくれるという意味では、そうした要望に極力応えていく必要があると感じています。

さて、Sさんの他にも何人もの知的障害の方が図書館に来館して下さっていますが、随分前から図書館を待ち合わせ場所として利用してくれている仲間をご紹介します。

緑図書館には、土日になると必ずやってくる知的障害者のグループがあります。彼らは女性一人、男性四人の仲間で、まず朝の十時前後に緑図書館に集合し、それから一緒にあちこち出かけて行きます。最近新しい女性と男性の仲間が一人ずつ増え、多い時には七人の人が集まります。彼らは皆「すみだ教室」という学校卒業後の知的障害の方を対象にした青年学級の仲間です。

この「すみだ教室」は知的障害の方を対象とした社会教育事業としては全国でも初めてのもので、一九六四年(昭和三九年)設立以来、現在まで四〇年以上も続いています。現在は百人ほどの受講生が九つの班に分かれて、日曜日を中心とした年二〇回ほどの集まりで、スポーツやレクリエーション、クラブ活動や年賀状作り、研修旅行や社会見学などを行っています。五年前から

は四十歳以上の人が所属する壮年部もできるなど青年学級といっても高齢の方も多く、受講生の他に講師十五名、ボランティア十六名など三十名以上の協力者が運営に協力しています。

緑図書館に異動した頃、土曜日の残り番の時や日曜日など必ず図書館にやってくるMさんと出会いました。Mさんも「すみだ教室」に古くから通っている軽度の知的障害の方で、それこそ小学生の頃から緑図書館に来ていたようです。私が緑図書館に異動した当時の館長が、三〇年以上緑図書館に勤務しており、昔からMさんとよく話をしたり、お菓子を一緒に食べたりするなど、Mさんは館長を慕って図書館を訪れている様子でした。

彼は中学卒業後、箱に包装紙を貼る会社に就職し、今でもその会社で働いています。よくあまった包装紙を持ってきてくれるのですが、なかには拡大写本の見返しの紙として最適の包装紙などもあって、助かっています。



多くの知的障害の方たちが卒業後就職したにもかかわらず、何年あるいは何十年かして会社を辞めざるを得ない状況になっていくのを目の当たりにしていると、彼のように、すでに三〇年近く働き続けているのは稀

なケースのように思われます。特にバブル崩壊後、よく緑図書館を利用して利用者が続けて会社を辞めなければならなくなりました。

このグループの一人Bくんも昨年の四月で今まで仕事をしていた会社から事実上リストラされ、新しく新設された授産施設で働くことになりました。Bくんが緑図書館に来た時に色々話をしてくれた所によると、昨年の三月までは一般の会社で働いていましたが、数ヶ月分の給料が未払いで話をしても埒が明かないため、その会社で働き続けることができなくなり、授産施設で働くようになったといえます。彼が四月分の給料として授産施設から貰ったお金は七千円ということ、以前働いていた会社からもらっていた給料の十分の一にも満たないと嘆いていました。(四月から正式に働くかどうかはつきりしていなかったので、全日働いた給料ではないようでしたが)彼は「これじゃ何にも買えないよ。」と話していました。前の会社では月九万円くらい、仕事がありません。時間も六、七万円を貰っていたといえます。

先のすみだ教室に通っている仲良しグループ五人の内、四人はつい一昨年まで一般企業に勤めていたが、四月にB君がやめたので、残っているのはあと二人

になってしまいました。Bくんが「あー、二人になってしまったよ。二人にはがんばって貰わなくては」と一般の会社にも勤めている二人にメールを送る発言をしていたのがとても印象的でした。



▲給食を食べるか食べないかの意思表示をする置物。上に書いてある名前はふれあいセンターの職員の名前で、その日の担当者の名前だけ立てて、意思表示をします。



酔夢亭読書日記

第十章

安田章



韓非子 その三

韓非子は韓の国の公子であり、刑名法術の学を唱え、吃音で弁論は不得手であったが文章力に秀でてい

た。その思想の根本には黄老の学がある。

これが司馬遷の「史記列伝」に紹介される韓非子像である。しかし、韓の国の公子と言っても王の正妻の子ではなく、母の身分は低く、王族の一員だったにすぎず、蝶よ花よともて囃されて成長したわけでもなさそうである。おまけに韓の国自体がこの時代（戦国時代末期）、強國秦に脅える弱小国だったわけで、公子と言ってもそれほどありがたい身分でもなかったものと思われる。

韓非子が、三島由紀夫「金閣寺」で描くところの吃音の主人公溝口のように「行動が必要なときに、いつも私は言葉に気をとられている。それというのも、私の口から言葉が出ていくので、それに気をとられて、行動を忘れてしまうのだ。私には行動という光彩陸離たるものは、いつも光彩陸離たる言葉を伴っているように思」ったかどうか、それは分からない。しかし、一般に吃音というものが「言葉が出てにくい」もので、「どもりさえ治れば何でもできる」と考える「デモステネス・コンプレックス」の棘に苛まれる心理的症狀を呈するものだとするならば、戦国時代の遊説家としてはかなりなハンディキャップがあつたに違いない。

「およそ君主に説くことの難しさは、君主に説くほど

の内容を自分でわきまえることが難しいというのではない。また、自分の意向をはっきり伝えるまでに弁舌をふるうことが難しいというのではない。さらに、自分の思いどおりに自由自在に弁じたてて語りつくすことが難しいというのではない。およそ説くことの難しさは、説得しようとする相手の心を読みとつて、こちらの説をそれに合わせることができるかというところにある」（説難（ぜいなん）篇）には違いないが、立て板に水のように言葉が流れていかないことには真剣勝負のダイベートの場では不利は否めない。

紀元前四世紀アテナイの雄弁家デモステネスの場合は、吃音を克服するために口の中に小石を入れてエーゲ海の波濤に向かい発声練習を繰り返したそうだ。腹の底から声を出すために横隔膜を鍛え、肩の上に剣を吊り下げ、発声の時の見苦しい肩の動きを矯正しようとした。

おまけに、ふらふらと外に遊びに出てしまわないように頭の髪の半分だけを剃り落としまでしたのである。

空手の達人、「空手バカ一代」と称えられた大山倍達
が山に籠もつて修行するとき、下界への未練を捨て去るために片方の眉を剃り落とした逸話を思わず彷彿と



させるではないか。

ところで、「どもり」という言葉は使つてはならない差別語であろうか。通常「どもり」という代わりに「吃音」と言い換えられることが多くなつたそうである。「たとえば三島由紀夫の『金閣寺』の映画化である、市川雷蔵主演の『炎上』は、役者がせりふの中で頻繁に使うへどもりVが自主規制されてから一時、無音化されてしまった。しかし、最近NHKで放送された『炎上』では、無音化されていたへどもりVが復活してたりする」

差別語や差別表現に対する規制の根拠や基準はありやなしや？と考えさせられるが、このあたりどうもはつきりしないようである。「わたしはへどもりVを死語にしたくはありません。へどもりVが使えなくなることは、私たちの存在そのものが、否定されているように思えます」と、伊藤伸二は強く訴えている。

因みに法的には「吃音は障害者手帳が交付されず、障害と認定されていない」

差別語ということ言えば、「中国」の呼び方を「支那」と表現してはだめだ、というものがある。しかし、本当に「中国」を「支那」と表現するのは差別であるのだろうか。何らかの基準や根拠というものが果たしてあるのだろうか。

「支那」の音は「シナ」であり、語源は春秋・戦国時代

に終止符を打った統一国家「秦」から来ているそうだが、この「秦」がペルシア語で「チーン」(Chin)、アラビア語で「シーン」(Sin)、インド諸語で「チーナ」(Cina)となり、大航海時代インドにやってきたポルトガル人を介して「チーナ」(Cina)が、他のヨーロッパ語に広がっていった。英語の「チャイナ」(China)、フランス語の「シーヌ」(Chine)、ドイツ語の「ヒーナ」(China)、イタリア語の「チーナ」(Cina)など、すべてポルトガル語源である。



一方、江戸時代日本にやってきたイタリア人宣教師シドゥッティから西欧人の知識を仕入れた新井白石は、日本人が「漢土」とか「唐土」とか呼んでいるものをヨーロッパ人は「チーナ」といつていることに注目し、後漢の時代、仏教の經典が漢訳されたときに「チーナ」が「支那」に音訳されているのを探しだし、これに当てたのが「支那」の呼称が定着した始まりだとのこと。

こうして語源を探求していつてみると、「支那」という表現に格別、差別語という根拠がありそうもないのだが、果たして読者諸兄は如何お考えであらうか。

今回の参照、引用した文献は左記の通り。

以下次号

- 「韓非子」第一冊 金谷治訳注 岩波文庫
- 「史記列伝」(一)小川環樹他訳 岩波文庫
- 「中国文明の歴史」岡田英弘 講談社現代新書
- 「金閣寺」三島由紀夫 新潮文庫
- 「知っていますか?どもりと向き合う一問一答」

伊藤伸二 解放出版社

愛知万博

-視聴障害者にも楽しめる愛・地球博-

平瀬 徹

愛・地球博は、「自然の叡智」をテーマに九月二十五日まで名古屋市の東部丘陵で開催されています。

遠方からお越しの方々にも愛知万博を満喫していただけるよう、私なりに攻略テクニックをまとめてみました。参考にしていただければ幸いです。

交通アクセスについて

自然環境への配慮と交通渋滞緩和のため、会場周辺には駐車場がありません。

一般駐車場からは無料シャトルバスに乗り換えて来場することになります。この無料シャトルバスの多くと、名

古屋・黒笹・尾張瀬戸駅からのシャトルバスは東ゲートに到着します。

しかし、東ゲートの近くにはパビリオンがありません。一番近いパビリオンまで早足で十分はかかりますから、到着したところには既に長い行列ができていていることになり、このルートはお勧めできません。

西ゲートには障害者専用駐車場(百台、車イス利用者優先の予約制)があります。

西ゲートから入場したら、まずは外国パビリオン、気ナンバーのドイツ館に行くか、長久手日本館、マンモスラボに入るのがよいでしょう。マンモスラボは、弱視の方は一番右の列がお勧めだそうです。

リニモは北ゲートに到着します。

リニモには地下鉄東山線藤が丘駅と愛知環状鉄道万博八草駅から乗ることができですが、藤が丘からは混雑します。名古屋駅からJR中央線を通じて愛知環状鉄道に乗り入れる「エキスポシャトル」とリニモを乗り継いで万博会場駅までの往復切符が販売されています。

この切符は身障者割引よりもお得ですし、万博会場内の乗物にも割引があります。



さらに、もしリニモが混雑していたら、万博八草駅から瀬戸会場までのシャトルバスにも乗車できますので、会場アクセスの選択枝が一つ増えることになります。

入場はケアセンターから

障害者と介助者、家族は長い列に並ばなくてもケアセンターから入場することができます。ただし、ロープが張ってあつて一般来場者は通れないようになっていしますので、会場にいったら係員に声をかけ、案内してもらいましょう。

ケアセンターでは、CDつき点字ガイドブックの貸出を受けられます。また、バリアフリーマップが配布されています。足が不自由な方に対しては車イスの貸出もあります。

会場に入ったら

殆どの来場車は入場するとまずは企業パビリオンに走ります。

北ゲートから入場した場合は、一つくらいは待ち時間なしで企業パビリオンに入ることができるかもしれません。前回のドイツ館に行きたければ、ここはグッと我慢して西ゲートまでIMTSという電車に乗るのがよいでしょう。

もしどうしても一つ見たいということであれば、ワンダーサーカス電力館がお薦めです。ライドに乗って、立ちの駅、万華鏡トンネル、銀河の駅、天空の駅、珊瑚の駅、ふくろうの駅、四季の駅、祭りの駅、明日への感動スマイル〜さらなる旅立ちの駅を巡ります。

視覚障害者にはICレコーダーとヘッドホンによる音声ガイドを貸してくれます。祭の駅では、各地のお祭の笛や太鼓の音を体感できます。

午後三時ころまでは、外国パビリオンや日本ゾーンを回るのがいいと思います。食事も、名古屋名物を食べたというのでなければ外国パビリオンのレストランやファーストフードのほうが安くて美味しいと思います。

ドイツ館もライドで回りますが、展示スペースを乗物で回るといっただけで、とくに周りから音が聞こえてくるということはありません。一箇所ジェットコースターのような雰囲気味わえるシーンがありますが、アナウンスも閉鎖されたライドの中のスピーカーから聞こえるだけなので、とくに視覚障害者にお薦めというものでもありません。

ヨルダン館では、塩分二五%の死海浮上体験ができます。膝を曲げて耳までつけるようにすると、楽に浮くことができました。膝を伸ばしたままだと足が浮いてし

まうのです。とても不思議です。夕方、歩き疲れたときに死海プールに入ると、リラックスできて疲れもとれるそうです。出た後はお肌がツルツル、女性にもぜひお薦めしたいです。入口には塩の結晶が展示してあって、触ることができます。堅い石のような触り心地でした。

イタリア館では、視覚障害者であることを告げると、別室で古代ギリシャのブロンズ像「踊るサテュロス」の模型を触ることができます。原寸大、二分の一、五分の一の模型があり、点字表示もありました。

長久手日本館は、PDAによる音声ガイドがあります。ゾーン二に建



物の触知模型と点字地図があります。建物が竹でできているためか、待ち行列も涼しく、ストレスはありません。

大地の塔には点字パンフレットと触知模型があります。

シンガポール館では、スクールの体験ができます。入口で傘を貸してくれます。マールライオンの像にも触れます。マンゴウアイスも美味しかった！

オーストラリア館では、カモノハシの大きな縫いぐるみに触れます。フィッシュ&チップスやワニロールもお勧

めです。

フィリップン館では、ココナツドームの中でひと休み。アロマのとてもよい香りに癒されました。先着六十名まで、オイルマッサージを無料で受けることもできるそうです。

クロアチア館は、塩田にも触れましたし、塩のプレゼントもありました。

チエコパビリオンは、いろいろな楽器が展示してあって、鳴らしてみることが出来ます。チエコのビールは日本に輸入されていないので、ぜひ味わってみて下さい。アルコール度数が低く二・七%くらい、しかしとても苦みがあります。

オーストリア館では、ウィンナワルツに誘われ、手ほどきを受けることができます。ご一緒していただいたガイドヘルパーさん、手を上げておきながら見てるだけ状態。「ずる〜い！」その後木櫃にも乗りました。

スイス館では、来館者全員に音声ガイドが配布されました。スイス軍が使用しているポケットランプ（懐中電灯）を改造した音声ガイドを持ち、展示物に照明を当てると、その紹介を音声で案内してくれるようになっていました。

ポーランド館では定期的にピアノの生演奏が行われ

ているそうです。塩の採掘場が再現してあって、ここでも塩の結晶に触れます。なめてもいいと言われました。イギリス館では、コウモリからヒントを得て開発されたという超音波白杖「ウルトラケイン」が展示されています。

近々ジオム社と日本点字図書館から販売されるそうです。

地球市民村には、アマチュア無線局があります。点字のパンフレットもあるようです。

エキスポドームやエキスポホール、野外ステージで行われるライブを楽しむのもよいでしょう。

外国パビリオンを見た後はキツコログンドラで

企業パビリオンエリアへ

ヒタチ館は、3D映像で視覚障害者にはつまらないと言われていましたが、動物に息を吹きかけられたり、体感できることもありますし、ナレーションも分かりやすく十分楽しめると思います。ライドに乗る前のネイチャアビュアーは使えないので借りる必要はないかも。障害者優先入館制度があります。

ガスパビリオンは、映像と実際人が行うマジックとがリンクしたショーで、炎が出れば熱感もありますし、十

分樂しめました。障害者優先入館制度と、点字・墨字併記のパンフレットの貸出があります。

トヨタグループ館は、前半のロボットのバンド演奏は体験できます。後半は音楽だけでDJがないので、点字冊子を読みながら視力がある人に説明していただければ楽しむことができます。

三井東芝館にも障害者優先入館制度があります。先にプレシヨアエリアに案内され、一般入館者が来場して来るまでの間に音声ガイド付きのプレシヨアを見ることとなります。メインシヨアは、座席に取りつけられているステレオスピーカーから拍力ある音声が出てきます。

エンディングでは、スクリーンが外れ、ミニシアターの壁もなくなつて…。

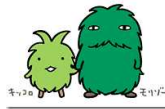
瀬戸会場

万博としてはおそらく初、市民参加型のゾーンがあります。

なかでも、布草履作りが人気ようです。

森の中を植物に触れながら歩くガイドツアーもあります。

長久手会場と瀬戸会場間は、モリゾーゴンドラが便利です。途中住宅街を通るため、窓が液晶で目隠しさ



モリゾー

れますが、景色が美しい無料なので何度も行きたい人もいらつしやるのか。

このように、視覚障害者でも体感内容いっぱい万博です。

皆さんもぜひお越し下さい。



主要症状に対する理療施術(五)



健康医学としてのあんま・マッサージ

小池上 惇

数回に渡り、いろいろな症状に対するあんま・マッサージ・指圧治療について書いてきました。その他にも施術対象となる症状としては、頭痛、顔面痛、眼精疲労、気管支喘息、高血圧、便秘など多数あります。

しかし、一つ一つの症状について見ていくと、鑑別法や診察などかなり難しい内容になってしまいました。

そこで、このシリーズのまとめとして今回は健康に対するあんま・マッサージ・指圧の役割について書いてみたいと思います。



(一) 現代社会と健康

近年、わが国における社会の著しい変化はコンピュータやロボットの導入に象徴されるような産業構造の近代化、第三次産業、中でもサービス業に携わる人口の増加、女性労働人口の増加、深夜勤務者の増加などに集約することができます。

このような産業構造の変化により肉体的疲労が減少する一方、精神的なストレスや疲労を増大させる原因となっています。

また、核家族化が進んだ家庭生活においても、遠距離通勤あるいは単身赴任の父親、仕事を持つ母親、塾に通う子供達と、家族一人一人の生活パターンにずれが生じ、少人数の家族でさえ一体感を共有することが困難な時代になっていきます。

このようにめまぐるしく変化する現代社会の中で人々は常に高度なストレスにさらされています。そしてこれらのストレスが引き金となって体の不調を訴える人も増えてきています。

更に過剰な栄養と運動不足も健康の阻害因子となつていきます。



(二) 健康の保持増進とあんま・

マッサージ・指圧療法

ストレスによって起こる不定愁訴を取り除き、健康の保持・増進を図ることはあんま・マッサージ・指圧の重要な役割の一つです。

不定愁訴で悩まされている人の体には、内臓体壁反射などにより体表の様々な部位に知覚過敏やこりなどの異常な反応が現れます。

特に肩や脊柱の両側にはよく現れます。この異常に対して軽擦法や揉捏法・圧迫法などを行うことによりこれらの緊張が改善され、体を正常な状態に戻すことができます。

東洋医学には「未病治」という考え方があります。ストレスの蓄積により、病気になる前の状態である半健康状態のうちに治療すれば病気になるなくて済むというわけです。

健康を保つためには、適切な食生活、適度な運動、十分な休養が必要ですが、それとともにマッサージも大きな役割を果たしています。

健康に対する意識の向上とともにリフレクソロジー、整体術、カイロプラクティクなどマッサージ類似の手技療法に関心を持つ人が増えてきています。

これらの多くが、正式な資格を持たない人たちによって行われています。

多くの人が、安価で良質なマツサージの治療が受けられる時代が来ることを期待し、このシリーズを終わらせていただきたいと思えます。



横浜漢点字羽化の会の機関誌「うか」が第五〇号を迎えました。

創刊が平成九年（一九九七）四月で、それ以来隔月発行を原則として、一回も落とすことなく満八年二月です。その間、編集担当者は何度か交代し、一時は発行自体が危ぶまれる場面もありましたが、何とか乗り切ることができました。これは編集、印刷、製本の各作業に携わる方々の絶え間ない協力があってこそその成果ですが、それにも増して重要な原稿の収集と執筆に、岡田代表の絶大な努力があつて初めて実現できた

成果だと思えます。

羽化の会の活動形態は、基本的には漢点字への変換のもととなるテキストファイルを入力して、それを漢点字印刷用ファイルに変換し、点字プリンターで打ち出すという点では最初のころと変わりませんが、いわゆる「IT」技術の急速な変化にしたがつて、周辺技術が飛躍的に変化（進歩）しました。

初めのころ、パソコンはMS-DOSと呼ばれるOSで動くものでした。

そして、変換した漢点字をパソコンの画面に表示するのに、外字を使用しますが、それがNEC製のパソコンの「太郎（バージョン四）」でしか使えないものだったので、使用する機種まで限定しての作業となりました。

パソコン自体の性能は、最近のものに比べたら何桁も差がある、低いものでしたから、変換作業そのものにも時間と労力を要したものです。

会員間の情報交換にはパソコン通信が利用されました。

そのころは、パソコン通信を維持していくのにもかなりの費用が必要だったので、横浜市がボランティアの福祉活動に役立てようと、「ラポール・ネット」という参加費無



料のパソコン通信網を作ってくれました。

われわれにとっては非常にありがたいもので、会員間の情報の伝達に役に立ちましたが、今のインターネットによるメールのやりとりには比べたら、スピードの点でも送れる情報の量の点でも、大きな落差があるものでした。

パソコンのOSも、MS-DOSからウィンドウズに代わり、その性能も飛躍的に向上しました。

視覚障害者がパソコンを使用するのに欠かせない音声装置は、MS-DOSの時代には高価な特別の装置を外付けしなければならぬものでした。

それがウィンドウズになり、パソコンも音声装置が内蔵されるようになって、ユーザーが開発するプログラムで自由に利用することができるようになった(95Reader)も開発、販売されるようになりました。

テキストファイルを漢点字ファイルに変換するソフト(プログラム)は、岡田代表の想像を絶するような努力の結果生まれた漢字コード・漢点字対照表(ファイル)をベースにして、当会会員の吉田信子さんのご主人・吉田英さんが最初に開発されました。

EBR(エイブル)というこのソフトに付けられた名前前は、八点を表すeightと点字を表すBrailleを組み合わせた

て作られたものです。この「e」には吉田英さんの「英」の意味も含まれているような気がします。その後、私がプログラムの開発を引き継いで、ソフト名に「E」をつけ、さらにウィンドウズ版になってからは「W」を付加して、現在に至っています。

プログラムの開発にあたっては、常に岡田さんに使っていたとき、新たに出される要望に添って開発を進めたものです。

その結果、このソフトは本来のテキストファイルを漢点字文書に変換するという機能の他に、ピンディスプレイを併用して、漢点字を利用しながら視覚障害者がテキストファイルを入力することができるソフト(エディター)ともなっています。

漢点字変換の速度は、最初は一つのテキストファイルを漢点字変換するのに三十分近くの時間がかかったのですが、プログラムの改良によって一分以内で収まるようになり、さらにウィンドウズの時代になって一秒程度になりました。

最近のパソコンは性能が飛躍的に向上し、変換はほとんど瞬時に行われて、パソコンの中で複雑な変換作業が行われていることを完全に忘れさせてくれます。

パソコンの使用環境も大幅に変化しました。



すなわち、パソコンの使用目的が主として画像を扱うことが多くなり、インターネットのホームページの閲覧やデジタルで撮った写真の加工などに利用されています。

それらを扱うソフトも大規模なものが多くなり、データとしてのファイルも大きく、大量になるので、ハードディスクの容量も数十ギガバイトというのが普通になり、四十メガバイトのディスクで充分だと満足していた時代が嘘のようです。

点訳などの文字を主体とした利用では、それ程大きなディスク容量は必要としませんが、それ程高性能のPCはいらないのですが、世の中の動きを止めることはできません。OSそのものもどんどん変化していきます。

折角開発した漢点字変換ソフトも、その変化についていけないと、そのうちに古いパソコンでしか使えないといった状況になるかも知れません。それが今のところの最大の心配事です。



〈差別語・不快語〉考(2)

岡田 健嗣

以下、前号の引用文を再掲します。

《(前略) ミハイ・ナデインは『文盲の文明』(未訳)で、そうした文字に頼らない新しい文明の、現在進行形の可能性について述べている。(中略) 文字は情報の伝搬を飛躍的に容易にした。その一方で、読むのは孤独な体験だ。高すぎる知性がコミュニケーションを低下させるのが問題であるなら、過度に「読む」のもまたコミュニケーションの敵だ。(中略) 今すでに、映像と音のほうが本より効率が高い状況は生じつつある。読むのに何日もかかるハリポタ最新刊だって、映画なら二時間半ですむじゃないか。そして同時に、読めるようになるための訓練の時間と労力はバカにならない。ホントにそんなコストを全員が負担する必要があるんだろうか。

(中略) 社会全員ががんばって読み方を勉強し、それぞれ個別にハリポタだの『戦争と平和』だの『裸のランチ』だのを読むよりも、みんなが手抜きでしか読み方なんか勉強せず、結果として湧いてきたこらえ性のない文盲寸前の連中が、まあ四、五ページずつ読んでそれをネットやらケータイやらでやりとりして、群盲がゾウをなでるようにしてある作品の全貌を描き出す(中略) ケータイやネットが

社会の崩壊につながるといった議論はあるけれど、たぶんそれはウソだ、むしろケータイでの愚にもつかない会話によつて成立する社会とはどういうものかを考えたほうがいいのだ。(山形浩生著『脱文字文化への移行』、文學界二〇〇五年三月号、文藝春秋社)

二

右の文章は、『文學界』の『エッセー』の欄に掲載されたもの一部である。

前回に続いて、「文盲」という用語を考えてみたい。

前回私は、『人権』の意識の芽生えからノーマライゼイションと身体障害者の社会参加、そしてその障壁について述べた。その中に『差別』の意識と概念が持ち込まれて、『言葉』にも及ぶようになった。

一九六〇年辺りまでは「文盲」という語は、普通に用いられていたと記憶する。

その後東京オリンピック、大阪万博等を経て、我が国も一流国としての対面に気を配らなければならなくなつたためか、国連を中心としたコンセンサスに、積極的に取り組む姿勢を見せるようになった。

そのメルクマールが、『人権』であり『子供の権利』、『障害者の権利』の批准と施策の構築である。「文盲」の語も、人知れず紙面から姿を消して行つた。(とはいえこれらの施策には、致命的な欠陥が指摘されている。)

その由来が、当事者の参画が閉ざされているところにあると言われ、現在大きな課題として現れている。項を改めて考えてみる積もりである。)

「文盲」を『広辞苑』で引いてみた。

《【文盲】／文字の読めないこと。また、その人。「一率」／↓識字(しきじ)》

《【識字】／文字の読み書きができること。「一運動」》
「文盲」のアントニムは「識字」だ(?)と記されている。

一九六〇年代以後、「文盲」という語に代えて、もっぱら「識字」が用いられるようになったが、アントニムである以上、そのままでは使えない。

一般には「率」を後置する用法が多用されている。「文盲率」を「識字率」に置き換えるには、プラスとマイナスを入れ替えるだけでよいからである。しかし、「識字」のアントニムが必要となるとき、いったいどうすればよいのであるか?これが今回のテーマである。

「識字」のアントニムには、通常「非識字」が当てられる。

「文盲」のアントニムが「識字」であるとされるのだから、「非識字」と「文盲」はシノニムということになる。

だが「非識字」は、「識字」に「非」を前置しただけの語で、いかにも据わりの悪いものに感じられる。

そして「文盲」は「人」を指すが、「識字」は「文字の読めること」であつて、「人」は指さない。同様に「非識字」も

「人」は指さないのである。

そんなところから、「文盲」の語が再登場の機会を得ることとなつて、あのベストセラー、W・シュリンク著『朗読者』のテーマとして、大きな働きをしたのである。私はそう想像する。

ところでこの「文盲」と「識字」がアントニムだというが、それにしても何か異質な語ではないか？たとえ意味が反対であっても、質を共にするのがアントニムの関係ではないだろうか。そこで、この二つの熟語を訓読してみると、

・文盲↓文に暗し
・識字↓字を知る

そして「非識字」の訓読は、「字を知るにあらざ」である。「文字」の「文」と「字」の二つの文字は、それぞれに別個の意味を有するが、ここでは同じ意味と捉えておきたい。こうしてみると、この二つの語の性格の違いが明らかになる。「識字」の「識」は、事実をそのまま表現しようという語、「文字」を知っているか知らないか、「文字」の読み書きができるかできないかを問うているのに対して、「文盲」の「盲」は、「暗い」状態を表している。読めない・書けないというのではない。「暗い」ので結果的に読めないし書けないのである。

だがこの「暗い」も、物理的に光が差さない状態を言うのではなく、先の見通しがつかない、ものごとを学ぶ機

会が得られなかった、世間に通じていない、暗愚な状態を余儀なくされている、そういう意味を含んでいるのである。

つまりこの「盲」は、目が見えないという物理的・生理的な状態を表しているばかりでなく、「文字に暗い」(通じていない、愚かである)という、(喩)(メタファー)なのである。

〈盲、瞽、瞎、民、氓、矇〉

以上は『漢字源』(藤堂明保編、学習研究社)から、JISコード第一水準・第二水準から抽出した文字である。ご覧になって、何か異様に感じられた方もあると思う。

私自身この作業では、いささか辟易させられた。これらの文字は、「めくら」をキーワードに抜き出したものであるからである。

〈盲〉という文字は、文字通り「目を亡くす」ことを表している。〈瞽〉は、盲目の人の眼が、まぶたによつて閉ざされていることを表している。〈瞎〉は、片方の目を傷めて、視力が失われていることを表している。

〈民〉がなぜに「めくら」なのか？その昔、戦いに敗れた人々は、奴隷として使役されたのだが、その際、目を突かれて視力を奪われて、逃げられないようにされたと言われている。

それを表すのがこの〈民〉の字であり、〈氓〉も同意の文字である。東アジアでは、デモクラシーの担い手であるシテイズンの〈民〉はいないのである。

〈蒙〉は、「目が暗い」ことである。その意味はこの文字に含まれる〈蒙〉(暗い)に由来する。

〈蒙〉の字は、中国の北方を拠点としたモンゴル民族の呼び名に漢字を当てるときに、北方の未開の民(北狄)の意を込めて使用された文字と言われている。

「暗い」とは、歴史的にもこのように使用されていたのである。その意味で、〈蒙〉も、また〈妄〉(〈盲〉と同義)も、「めくら」の意味に用いられる文字であった。

日本中世史の網野善彦先生によれば、身体の障害―盲目、手足の不具、知的障害、精神障害―を〈笑い〉の対象とするようになったのは、中世・室町時代の中期、応仁の乱辺りからだと言う。

文献資料中では、実にあつげらんとそのような障害を笑い飛ばしていると言う。

恐らく現存する最も古い芸能である狂言の演目にも同様のものがあるはずで、できることならば歴史の資料として、上演していただきたいものと願っている。

そのような〈笑い〉は、古代王朝から中世にかけて、農業の生産性が飛躍的に増進したこと、それによる他の分野の生産性の促進と消費財の増加、商業の発達、交通の発

達、身分制の変容、各地域の自治意識の高まりというダイナミックな変化がもたらしたものと言う。

この〈笑い〉は庶民のもので、王朝貴族や徳川期の武家にはないものであった。

現在でも下肢障害者の歩行を真似たり、手の奇形や変形を揶揄したりということは、決して珍しくない。

テレビのバラエティー番組の〈笑い〉の大半がこのようなもので、むしろ〈笑い〉の本質が、他者の異形への蔑みかと思うと、自らの頬の緩みにも、意識を禁じ得なくなってくる。(〈笑い〉はこのようなものばかりではないのは勿論である。先人の考察に耳を傾けることを軽んじてはならない。)

『広辞苑』で「めくら」の語を含む熟語を引いてみると、これはまた驚くほど多数に上る。

《めくら【盲・瞽】／目が見えないこと。また、その人。↓盲(もう)。／文字が読めないこと。また、その人。／物事の弁別のつかないこと。また、その人。》

とあって、「盲千人目明き千人」「盲、蛇に怖(お)じず」「盲打ち・盲撃ち」「盲鰻」「盲壁」……と続く。

「めくら」の語が中程や後ろに来る熟語も、多数あるはずだ。また〈盲〉を「もう」と読む漢語熟語も溢れるほどある。つまり、それだけ「目が見えないこと」は、注目され続けて来たことになるのだろう。

このようなことを（差別語）あるいは（不快語）の側面から見ると、一つの傾向の概括が浮かび上がって来るように思われる。

・四肢の障害↓笑いの対象↓醜さと滑稽

・視覚の障害↓知識・思考・判断能力の劣弱↓愚昧

（視覚障害者が美醜から解き放たれているわけではない。あくまで概括である。）

（差別）というのは何時でも何処にでもあり得る事態である。

たとえば「東京」という言葉を探ってみると、上方（京都、大阪）の人たちが口にするときその多くが、「田舎者の寄せ集まり」、「文化程度の低級なところ」を含意する。

「横浜」はどうかと言えば、「歴史が浅く薄っぺら」、「軽薄・スノップの集団の居住地」の意を与えられたりする。

このように言葉は、何の加工もないまま、多様な意味を付与されて使い回される。

冒頭に掲げた『エセー』に返れば、「文盲」、「群網」の語を使用するに当たって、今少しの熟慮・推敲がなされてもよかつたのではというのが、私の抱いた感想である。

著者の筆致はその意味で、「群盲撫象」の手つきになつてはいないか、そう感じたのである。

作家の筒井康隆氏が、現在『文學界』に連載されている小説、『巨船ベラス・レトラス』の登場人物「七尾靈兆」（明

き盲の詩人、目は見えないが外見的には明いているように見える意）の発言を引用させていただきたい。

私は詳らかにしないが、氏はかつて、（差別語）を指摘されたのを期に、一時断筆しておられた。

「あなたが何に怯えておられるのか、わたしは知りません。ひたすら息子さんの行く末を考えてお叱りになっていることはよくわかりますが、逆にそれはわたしどもにとつて非常につらいことです。あなたの怒りは息子さんをこんなに怯えさせるほど激しいものようですが、それは同時に息子さんが今後わたしどもを怯えることになる原因になるんです。この先息子さんが『めくら』という言葉をまるで『怪物』とか『魔物』とかいったもののようにしか感じられないとすれば、それはめくらであるわたしども自身を怪物や魔物のように思ってしまうことになりま。いやいやこれはあなたを責めているのではない、お願いしているんです。息子さんは体育の先生がいつも言っていることを突発的に口にしただけに過ぎなくて」

母親が息を呑んだらしく空気の乱れがあつた。「あつ。この子は、そんなことまで」（中略）

「奥さん。本当にわたしどもに対する差別的な言動を憎むお気持ちがあるんだつたら、ご自身の言動がそれを助長していないかどうかを考えてください。わたしは

詩人でことばには敏感です。何かに眼が眩んでめくらになつたと想像させることばは美しいと思われたいでしようか。眼の不自由な人ということばはわたしを悪寒に顫えさせるのです。盲という字は亡くした眼に対するまるで亡き人を想うような哀悼の心を想わせる字とは思われませんか。たとえ罵倒であれ『めくら』と言われてもそれが罵倒であると認識できる以上は『めくら』という言葉を憎むことはなく、言った人を憎むだけです。

いくら優しく『眼の不自由な人』と言われてもわたしどもはそこに底知れぬ差別的な感情や欺瞞を感じてしまふのです。それこそ片輪の僻みとおっしゃるならいっそのことあなたがたが昔から使っていてあなたがたが差別的と感じている盲、聾、啞ということばをそのままお使いください。聾なんていう字は、龍の耳と書きます。すばらしい字だと思いませんか。どうかあなたの中にある差別的な感情を追い出して、そのかわりに息子さんを許してあげてください。いかがでしょう」

『巨船ベラス・レトラス』第三、四回、筒井康隆、『文學界』二〇〇五年三、四月号、文藝春秋社)



「報告とご案内」

本誌・機関誌『うか』は、本号で五十号を迎えました。

記念すべき号です。隔月の発行にもかかわらず一度も欠けなかったのは、偏に編集・印刷・製本の実作業を担って下さった皆様の誠意と努力の賜物です。編集を担当して下さっている宇田川様、校正・印刷その他多くの雑務全般を行って下さっている木下様、毎号表紙絵を描いて下さっている岡様、そしてこれまでに力を惜しまず多くの分野でお力添え下さいました皆様に、深く御礼申し上げますとともに、今後も引き続き、よろしくお願い申し上げます。

また、ご寄稿・ご執筆いただいております皆様にも、同様に感謝申し上げます。今後もしも原稿を、お待ち申し上げます。

本来でしたら本号は、「五十号記念号」として発行しなければならぬものですが、会内外ともに多忙を極め、準備に着手できずに参りました。

年が明けますと、本会の現在の形での活動が、丸十年を迎えます。その辺りを目処に、特集号を組んでみたいとも考えております。よろしくご期待下さい。

一 「漢点字訳ボランティア講座」を開催します。

六月一五日（水）を初回として、四回シリーズで、漢点字訳ボランティア講座を行います。前回は二〇〇〇年に行いましたので、五年ぶりの開催となります。

この間にも、一般社会の、視覚障害者の文字をめぐる環境への認識も、徐々に変化して来ているように思われます。本会の活動を、より一層充実したものにしたいと行くことが求められていることを、ひしひしと感じております。

左は、毎日新聞に掲載された記事の一部です。毎日新聞社様には、心より御礼申し上げます。

《漢点字訳ボランティアしてみませんか「存在と必要性、広めたい」★知識なくてもOK。入力法など講座で★原本通りに点訳正確に意味伝達。通常の点字は六つの点で、かなと英数字を表現するが、漢点字は漢字の開始と終了を示す点を加えた八点文字で構成される。同会代表の岡田さん（五十五）は「漢点字は漢字の同音異義語など原本通り点訳できるので、文章の伝える意味がより正確に表せる」とその魅力を話す。★盲学校で教えず、普及これから。しかし、盲学校では教えていない漢点字はまだ広く普及していないという。岡田さんは「幼少からの視覚障害者は漢字を学ぶ機会がまったくない。ボランティアを通して漢点字の存在

と必要性が広まれば」と話す。会では、短歌などの点字刊行物や視覚障害者のリクエストに応じた点訳に取り組んでいる。◇パソコンで文字打てれば。ボランティアはパソコンを使った漢点字訳の入力の仕方などの講座を受講して始める。五年前からボランティアで参加している主婦の岸田晴美さんは「点字の知識はなかったが、パソコンで文字が打てれば大丈夫ということから始めた。漢字の成り立ちも分かり、とても面白い」と話していた。》（鈴木一生）（〇五年四月二十六日（火）毎日新聞（朝刊） かながわワイド掲載）

二 「漢点字講習会」を行っています。

〈漢点字〉を学びたい人（晴盲を問いません）のための「漢点字講習会」を、横浜市のご後援をいただいている。今年三年目に入りました。

視覚障害者にとって、触読できる漢字の体系は、〈漢点字〉だけです。何時でもご参加いただけます。漢字の知識を身につけて、真の社会参加を果たしましょう。お待ち申し上げております。

お問い合わせは、E-MAIL:

eib_okada@ybb.ne.jp (岡田)

羽化の会ホームページ、URL:

<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

題^ス下 不識庵 擊^ツ機山^ヲ一圖^ニ

頼^{らい}山陽^{さんよう}

鞭聲 肅肅 夜過^レ河^ヲ

曉見 千兵 擁^ル大牙^ヲ

遺恨^{ナリ}十年 磨^キ一劍^ヲ

流星光底 逸^ス長蛇^ヲ

不識庵 機山^を撃つ 圖に題^す

鞭声 肅肅 夜河^を過^る

曉^{あかつき}に見^みる 千兵^{せんべい}の大牙^{たいが}を擁^{よう}するを

遺恨^{いこん}なり 十年^{じゅうねん}一劍^{いっけん}を磨^{みが}き

流星^{りゅうせい}光底^{こうてい}長蛇^{ちやうだ}を逸^{いつ}す

不識庵 上杉謙信を指す。

機山 武田信玄を指す。

大牙 大将の旗。ここでは上杉軍の旗。
流星 打ち下ろす劍のひらめきのたとえ。

光底 劍の光りの下。流星光底は、流れ
星が光る一瞬の間という説もある。
長蛇 武田信玄をたとえたもの。

(謙信の軍勢は、信玄の機先を制すべく) 馬を駆る鞭の音も忍びやかに夜半千曲川を渡る。武田軍は、夜あけに数千の上杉の軍が大将の旗を擁して陣取っているのを見た。謙信は、長年磨きぬいた長劍で信玄に斬りかかるが、無念にもわずかなところで逃してしまった。

詩吟や劍舞でよく知られる七言絶句の詩。上杉謙信と武田信玄の五度にわたる川中島の戦いのうち、最も激しかった四度目の合戦を謙信がたの立場から描いている。この時、謙信と信玄の一騎打ちがあったとされる。戦いの決着はつかなかった。

頼山陽(一六八〇〜一八三二) 江戸後期の儒学者、詩人。著書に「日本外史」等がある。

